

戦時下の幼児向け童話

— 雑誌『婦人と子ども』(1904-1905) の分析 —

是澤 優子

A Study of Preschool Children's Content Stories from the Russo-Japanese War:
An Analysis of "Fujin to Kodomo" (1904-1905)

Yuko KORESAWA

1. はじめに

大人が子どもに話して聞かせる童話は、子どものために大人が意図的に用意した文化財であり、そこには子どものための文化を模索しながら創出した人の意識や時代性が反映される。

童話といえば、1918（大正7）年に鈴木三重吉が創刊した雑誌『赤い鳥』がその芸術性から高く評価されているが、それに先立つ時代に子どものための童話がなかったわけではない。実際、明治期は近代的な時代を生きていく子どものために、玩具をはじめ児童雑誌や子供服、文房具、生活道具などの生活文化が、大人たちの手によって次々と創出され始めた時代である。

幼稚園教育関係者を中心として1901（明治34）年に創刊した雑誌『婦人と子ども』には、「子ども」欄（以下、子ども欄）が設けられていた。本稿では、ここに載る童話が日露戦争下にその話題を大きく変えた点に注目した。『婦人と子ども』の童話について分析を試みた先行研究には柿岡（2005）や北川（2007）の論考があるが、戦時下の童話内容についてはふれていない¹⁾。

雑誌『婦人と子ども』の子ども欄に取り上げられた童話から、特に戦争に関わる物語に焦点を当て、それらを分析することにより、国家的な出来事が一雑誌の幼児向け童話の中にどのように照射されるのかを探ってみたい。子ども欄に掲載された戦争関連の物語に何が描き出されていたのか。その内容分析を通して、戦時下の幼児向け童話に示された戦争観と子ども像の一端を明らかにする。

なお、『婦人と子ども』が幼年期の子どもに関わる教育者と女性（母親）に向けた雑誌であることから、ここに掲載された童話は「幼稚園教育を受ける時期の子どもを対象とする物語」と考え、これらを幼児向け童話と捉えた。

2. 雑誌『婦人と子ども』の子ども欄について

雑誌『婦人と子ども』は、1901（明治34）年1月29日にフレーベル会から発行され、1919（大正8）年の第19巻第1号より『幼児の教育』に解題した。関東大震災後休刊を余儀なくされたが、

その後復刊して現在まで続く幼児教育専門雑誌である。

その第1巻第1号の「発刊の辞」において、「我国教育界刻下の急務」として、児童教育法の研究、婦人教育の普及、家庭向けの読書材料提供を挙げている。「(この急務に対して) 本誌は一方に於ては児童幼児と共に語り共に歌ひ共に遊びて其師友たらんことを期し他方に於ては、母としての婦人、教育者としての婦人の好伴侶となりて共に児童教養の任に当り共に高尚神聖なる家庭の快樂を得むことを期し」²⁾ であり、幼児教育の方法を研究するために設立したフレーベル会が雑誌を発行することで、幼稚園教育の発展と家庭教育、女子教育を押しすすめるために貢献するのだという意思を表明している。この雑誌の編集一切を、当時東京女子高等師範学校助教授であり幼稚園批評係でもあった東基吉が担当することが発行条件になっていた。

子ども欄は、創刊当初から巻頭に設けられていた。第1巻第1号から第6巻第12号までの題目は表1のとおりである。そこでは童話を先頭に、動植物の話、手遊びや室内遊びの紹介、なぞなぞなど、幼い子どもの興味を引きそうな内容を各種取り揃え、総頁のおよそ2～3割程度を割いている。第1巻第9号以降、1話目の物語は1頁28字×11行の1段組み、2話目以降の内容はそのほとんどを22字×15行2段で組んでいる。ひとつの号に複数の物語が紹介されているが、先頭に載る物語は活字が大きいいため主要な物語という印象を与えている。

創刊当初から編集の責任を負っていた東基吉は、後年「…私は附属小学校の批評係を兼任することになって、其方に多く時間を取られるようになったので、『婦人と子ども』の編集なり事務なりは一切和田氏にやって貰うことにして、私は雑誌から手を引いて仕舞ったように記憶して居ます。」と、回想している³⁾。

確かに、1908(明治41)年に東が宮崎の師範学校長として転出し、和田実が編集長となるのだが、その2年前の第6巻第4号(明治39年6月発行)以降、子ども欄は当初と異なる巻末に置かれている。そして、第7巻第1号(明治40年1月5日発行)には子ども欄がなくなり、お伽笑話、お伽訓話が各号1話程度取り上げられるのみとなっている。

さて、1900(明治33)年4月から東京女子高等師範学校附属幼稚園に勤務しはじめた東は、当時幼児のための童話材料に苦勞したことを、後年次のように回想している⁴⁾。

夫から幼児に聞かせる談話ですが、これは庶物の話と人事の話とに分けて居ました。(中略) 人事の話は所謂童話ですが、さて困ったことに庶物に関する話の材料として蜂や蝶々の舶来の立派な掛図はありましたが、童話の方には夫がない許りか、童話其ものさへ、小波さんが博文館から日本昔話…桃太郎やかちかち山などを出して居られる丈であったので、一向見当たらない、(中略) そこで私はグリムやアンデルセン其他日本橋の丸善に行つて西洋の童話の本をいろいろ探し出して、適当なものを片端から翻訳したり翻案したりしたものです。

幼稚園教育に従事し始めたころから童話の翻案に苦心した東は、『婦人と子ども』にも自ら翻案した童話を次々に掲載している。表1の執筆者名にある「やまとの翁」「牧羊」は東のペンネーム

である。先にも述べたように、東基吉が編集責任を任されていたことから、子ども欄は東の裁量で組まれていたと考えられる。

表1 「子ども」欄の項目リストおよびページ数（第1巻1号～第6巻12号）

| 巻号 (発行年) | 子ども欄に記された題目・〔執筆者の記名〕 | 子ども欄頁数 /総頁※ |
|-------------------|---|----------------|
| 第1巻第1号 (明治34年) | 椿の唱歌/子ねこ/なきごえ/狼と狐/ふしぎな文字 | 16/110 |
| 第2号 | いさましい少女*/鳥と子ども/影画/タコ/猿の物真似(一)[やまとの翁]/謎々 | 13/85 |
| 第3号 | たんじょーび/判田と小人/天神様とお馬/うまの唱歌/猿の物真似(二)[やまとの翁]/無精較べ/郵便切手のおまけ/謎々/無理なことはするな[羽山好作] | 19/89 |
| 第4号 | ゆき/てんじんさま/ねこと人/狼と狐後日物語/烏をとる法[やまとの翁]/人といふ字 | 15/80 |
| 第5号 | もゝ/へーたいあそび*/豆と炭と藁との話/雀をとる方/謎々の解/考へもの/早口 | 18/93 |
| 第6号 | ほたる/ほたるの唱歌/ワシントン/おひさんとおつきさま/狐と猫の話/ひげとほーき/鴨を取る方[飯島八千溪]/お月さまと星め[やまとの翁]/節儉家の集会/考へ物/謎々 | 17/96 |
| 第7号 | あさがを/唱歌/うさぎとかめ/鶏の葬式/紐遊び/朝顔と朝寝坊/一口話/前号の考へ物の解/この次の考へ物 | 20/106 |
| 第8号 | うらしま/とんぼの唱歌/丈助の忠義/紙の剪り方/戸外の遊び/とんぼ取り/恵みの滴[やまとの翁]/前号の考へ物の解/この次の考へ物 | 22/80 |
| 第9巻 | 丈助の忠義[やまとの翁]/室内遊戯 紙の剪り方/最善き紹介状[小西信八]/一口話/前号の考へ物の解/この次の考へ物 | 20/84 |
| 第10巻 | 鼠と鳥とおむすびとの話/室内手遊び 摺み方/ワシントンの勇行[やまとの翁]/一口話/考へ物 | 16/81 |
| 第11巻 | 黒子太郎[やまとの翁]/室内手遊び(摺み方)/ワシントンの勇行[やまとの翁]/独乙教育話[仁壽堂主人]/考へ物 | 23/84 |
| 第12巻 | 黒子太郎[やまとの翁]/室内手遊 摺み方/独逸教育話[仁壽堂主人]/謎々 | 18/80 |
| 第2巻第1号 (明治35年) | 黒子太郎/かごめの唱歌/同戸外遊戯/室内手遊(摺み方)/天狗の面/一口話/謎々/考へもの | 20/96 |
| 第2号 | 黒子太郎(完結)/紙の摺み方/馬車遊び/短編独乙教育話/一口ばなし/考へ物 | 15/80 |
| 第3号 | 骨ものがたり/獅子がり/無言の学士会/紙の摺み方/一口ばなし/考へもの | 18/80 |
| 第4号 | 骨物かたり/帽子と像/摺み方/狼奇談/笑ひの種/考へ物/謎 | 18/88 |
| 第5号 | 楽隊の大勝利[やまとの翁]/源ちゃんの英語[記者]/母の誕生日[矢橋小葩]/お笑ひ草/摺み方/考へもの/忠義な犬の話[やまとの翁]/前号考へもの、解/懸賞考へもの/第二巻第三号受賞者披露 | 23/88 |
| 第6号 | 楽隊の大勝利[やまとの翁]/小蝶物語[野口雨情]/二人の兄弟[矢橋小葩]/笑ひ草/一口話/謎々/懸賞考へ物 | 18/79 |
| 第7号 | 鷺鳥の念仏[やまとの翁]/小蝶物語[野口雨情]/吝嗇の誠[小島松之助]/おむすびとおだんご/笑ひ草/狐のお土産[独醒軒主人]/懸賞考へ物当選披露/懸賞問答 | 15/81 |
| 第8号 | 黒作と狼[やまとの翁]/小蝶物語[野口雨情]/傲慢な男[小島松之助]/樫の木とすゝき/笑ひ草/懸賞問答当撰披露/同次の問答/海水浴に行つて溺れぬ法/氷の誠 | 18/75 |

| 巻号 (発行年) | 子ども欄に記された題目・〔執筆者の記名〕 | 子ども欄頁数 /総頁※ |
|-------------------|---|----------------|
| 第9号 | 六人の武者修行〔やまとの翁〕/信濃蟹蔵〔雨情〕/腰折雀〔翁丸〕/懸賞問答 | 27/78 |
| 第10号 | 六人の武者修行〔やまとの翁〕/松葉牡丹〔雨情〕/次郎の海遊び〔愛鷗〕/ ぶた娘〔はる子〕/湯屋の大黒天〔とき子〕/懸賞問答当選/この次の懸賞問答 | 29/86 |
| 第11号 | お姫様の行方〔やまとの翁〕/面白き実験〔小島松之助〕/栗鼠退治〔雨情〕/ 問答/考へ物 | 14/69 |
| 第12号 | お姫様の行方〔やまとの翁〕/入道の降参〔雨情〕/蛙遊び/考へ物/一口話 | 19/79 |
| 第3巻第1号 (明治36年) | 打出の小道具〔やまとの翁〕/時計の唱歌/世界一の旅行博士〔北濤野人〕/ 笑ひ草/不老不死の薬〔翁丸〕/考へ物 | 23/84 |
| 第2号 | 打出の小道具〔やまとの翁〕/伊蘇普物語〔牧羊〕/お日様と風〔やよひ〕/ 考へもの、解/福引 | 16/71 |
| 第3号 | 蛇姫〔やまとの翁〕/伊蘇普物語〔牧羊訳〕/親猫と隼鷹〔やまとの翁〕/ 笑草〔みず子〕 | 20/79 |
| 第4号 | 伊伴物語〔やまとの翁〕/伊蘇普物語〔牧羊訳〕/不思議の裁判/兎と亀と/ 人の年を早くあてる法/簡易英語 | 18/82 |
| 第5号 | 百合姫〔やまとの翁〕/伊蘇普物語〔牧羊訳〕/簡易英語/慈善の麵包/ 三人の親友〔北斗女史〕/第三号問題の答/問題 | 17/79 |
| 第6号 | 百合姫〔やまとの翁〕/伊蘇普物語〔牧羊訳〕/簡易英語/ ころんぶすの卵〔牧羊〕 | 17/76 |
| 第7号 | 馬と狐〔やまとの翁〕/伊蘇普物語〔牧羊訳〕/アンドロクルスと獅子〔牧羊〕/ 真実の饗応〔きみ子〕/懸賞考物一題 | 17/72 |
| 第8号 | 鼯鼠と兎との競争/あるぶす越* /いそつぶ物語/一口ばなし/簡易英語 | 20/75 |
| 第9号 | 風の神/猿の裁判/いそつぶ物語/慈悲深い天子/懸賞なぞなぞ/ 懸賞考へ物の披露 | 21/72 |
| 第10号 | 風の神/ブロッサムの話/いそつぶ物語/考へ物二題/前号なぞなぞの解 | 25/76 |
| 第11号 | おちば〔くめ子訳〕/運野四九内〔やまとの翁〕/いそつぶ物語〔記者〕/ お笑ひの種〔近藤とき子〕/英語入短話〔久永童山人〕/英語一口話〔ゆき子〕/ 独乙の考へ物 同前号の解〔記者〕/室内の遊び(影しと目探し)〔記者〕 | 22/80 |
| | 運野四九内〔やまとの翁〕/いそつぶ物語〔記者〕/室内遊戯〔記者〕/ 英国一口ばなし〔ゆき子〕/前号考へ物の答え/この次の考へ物 | 20/72 |
| 第4巻第1号 (明治37年) | ばら姫物語〔やまとの翁〕/大蛇の土産/二人の音楽師/いそつぶ物語/ 室内のお遊び/考へもの(前号の答) | 29/83 |
| 第2号 | 鼯鼠(もぐら)の起源〔やまとの翁〕/いそつぶ物語/狐と烏/室内遊戯/ 奇妙な動植物/そろもんのちえ | 16/64 |
| 第3号 | 生命の水〔やまとの翁〕/賢い答/象のお話し(一)/室内おあそび/ そろもんのち江/福びき/考へもの一つ/河と海 | 22/68 |
| 第4号 | 生命の水(つ、き)〔やまとの翁〕/賢い答/象のお話し(二)/ 日露戦争福引四題*/笑話/背の高さと鉄砲丸* | 25/76 |
| 第5号 | 鬼中佐*〔やまとの翁〕/水雷のお話*/小学校の茶話会/いそつぶ物語/ 閉塞隊勇士の行状* | 35/80 |
| 第6号 | 金州丸*〔やまとの翁〕/いそつぶ物語/戦争のお話*/面白い問答法/ 螺国通信/考へ物 | 22/78 |
| 第7号 | 新鬼が島征伐*〔やまとの翁〕/いそつぶの話/馬の咄し*/一口話*/ 考へもの、答/犬のお家 | 31/76 |
| 第8号 | 鉄橋破壊*〔やまとの翁〕/いそつぶの話/お笑ひ草 | 17/62 |
| 第9号 | 真乃勇者*〔やまとの翁〕/猿と左官/愛馬主を救ふ*/ 教えを守って斃(たおれ)れた犬/お話三つ/怠惰者の祈祷 | 27/70 |

戦時下の幼児向け童話

| 巻号 (発行年) | 子ども欄に記された題目・〔執筆者の記名〕 | 子ども欄頁数 / 総頁※ |
|-------------------|---|-----------------|
| 第10号 | お隆さんの手柄*〔林天然〕/ 黒木大将と英吉利の小児* / 英吉利の小児の恤兵金* / さるとかみ / てまりうた二つ 桑田良隆 / 孟母三遷 / いそっぷの話 / 考へもの〔近藤登喜子〕 / 英語と獨乙語 | 21/69 |
| 第11号 | 兵卒フリッツ*〔やまとの翁〕/ いそっぷの話 / 賀陽宮殿下の御作文* / 考へ物の解 / 運動会の記 | 20/73 |
| 第12号 | 兵卒フリッツ(つゞき)*〔やまとの翁〕/ 花買り遊び / 亜米利加の子どもからの手紙* / 虎の子と鬼の子* / 画とき五つ | 16/70 |
| 第5巻第1号 (明治38年) | 蛙と指輪〔牧羊〕/ 正月のお遊び〔をきな〕/ お多福の集会〔林天然〕 / 音楽会〔その子〕 | 16/77 |
| 第2号 | けだもの会議〔やまとの翁〕/ 勇ましい少女〔太田龍東〕/ 嗅ぎ当てる法 / 軍服の色 / お多福会〔林天然〕 | 25/82 |
| 第3号 | けだもの会議〔やまとの翁〕/ 春三と「赤」〔おきな〕/ 和藤内の遊び〔おきな〕 / 勇ましい少女〔太田龍東〕 | 25/72 |
| 第4号 | 駱駝追ひ〔やまとの翁〕/ お話大臣〔太田英隆〕/ 指輪の遊び / 潮干とさゝえ / たんぼ / 君さんの摘み草〔太田龍東〕 | 20/59 |
| 第5号 | 駱駝追ひ〔やまとの翁〕/ お話大臣〔太田英隆〕 / いそっぷの話〔おきな〕 / 貝の運動 / 動物の保護色 | 19/68 |
| 第6号 | 蚕豆と赤石 / 鳥の智慧 / お話大臣 / ありとはと / むしのこゑ / 懸賞考へ物 | 21/62 |
| 第7号 | 小さい別嬪さん / 左甚五郎の鼠 / 一休のおはなし / 魚の感謝状 | 21/61 |
| 第8号 | 小さい別嬪さん / 石屋の槌造 / 蛙になれ / 懸賞考へもの披露 / 狐のちえ | 18/63 |
| 第9号 | 小さい別嬪さん〔やまとの翁〕 / 日露戦争と動物*〔林天然〕 / 不思議な物語〔太田龍東〕 | 31/60 |
| 第10号 | 金次のおはなし〔やまとの翁〕 / 不思議な物語〔太田龍東〕 / 鼠の智慧〔平岩繁治〕 / 子供の夏休〔おたふく〕 | 22/67 |
| 第11号 | 金次のおはなし〔やまとの翁〕 / 東一の手紙 / いそっぷのはなし / 不思議な物語〔太田龍東〕 / 考へもの | 22/70 |
| 第12号 | 四つの願(お伽噺)〔やまとの翁〕 | 17/67 |
| 第6巻第1号 (明治39年) | 白い雀〔やまとの翁〕 / 子供の新体詩 | 15/63 |
| 第2号 | 金の手斧〔やまとの翁〕 / なーに? | 10/70 |
| 第3号 | ダイヤモンドと蛙〔倭の翁〕 / 退屈しのぎ〔ひさ子〕 / 四つの銅像〔太田龍東〕 | 19/62 |
| 第4号 | 「切りのないお話」〔やまとの翁〕 (巻末付録欄掲載) | 10/62 |
| 第5号 | うだつは上がらないよ〔豊子〕 (以下の号より「子ども」欄は巻末へ) | 10/70 |
| 第6号 | 風船虫 / 福鼠 宝の山人 | 10/66 |
| 第7号 | おにばす〔記者〕 / 春子と夏子〔豊子〕 | 13/79 |
| 第8号 | 花ちゃん〔芙蓉〕 / お祖父様の肖像〔弥彦〕 / カンニトフェルスタント〔豊子〕 | 16/79 |
| 第9号 | お日さま / 福蔵と貧助〔硯山人〕 / 欲ばった罰〔弥彦〕 | 12/56 |
| 第10号 | 三人兄弟〔わたなべ〕 / もみぢ〔ゆき子〕 | 12/54 |
| 第11号 | よわ虫太郎〔弥彦〕 | 16/66 |
| 第12号 | 蟻の話〔小柳雪子〕 | 8/56 |

表1注：※ 総頁数は前付頁・後付頁・広告頁を含まない *印は戦争関連の内容

3. 戦争を取り上げた話の内容

(1) 戦いに関する話の掲載

子ども欄に掲載された戦いに関する話題は、1901（明治34）年に発行された第1巻第2号「いさましい少女」、第5号「へーたいあそび」の2題と、第3巻第8号「あるぶす越」である。

第1巻の2題は戦争そのものを描いたわけではない。前者はアメリカの話として、12歳の少女が兵隊に追われる叔父さんを機転を利かせて助ける物語である。後者は、描かれた挿絵（図1）を見て「みんなでなんにんいますか」と人数を問いかけ、「よにんでへーたいごっこをしているのです」と答えを示す内容である。また、「あるぶす越」はナポレオンの戦争話を「精神一到何事不成」という格言をよく表した実例として紹介している。



図1 「へーたいあそび」の挿絵
（婦人と子ども第1巻第5号1901年）

第4巻（1905年）第3号まで、戦いをテーマとする話題はほとんど見られない。ところが、第4巻第4号から第12号にかけて、戦争に関する内容が立て続けに取り上げられている。殊に、第5号から12号の子ども欄第1話目はそれまでの西洋童話翻案に代わり、戦争に関する物語を載せている。日露戦争勃発後に、戦争談話が子ども欄のメインを飾るようになったのである。

ただし、この類の話が戦争中を通して掲載されたわけではない。日露戦争開戦から終結（1904年2月8日～1905年9月5日）までの期間のうち、『婦人と子ども』では、1904年4月発行号から12月発行号まで9号にわたって子ども欄に戦争話を載せていたが、1905年に入ると再び西洋童話を前面に紹介するようになり、以後戦争の童話は同年第9号に「日露戦争と動物」が載るのみであった。

(2) 日露戦争下の子ども欄に掲載された戦争話の概要

では、西洋童話に変わり主役の位置に着いた戦争話ではどのようなテーマが取り上げられていたのだろうか。第4巻第5号から同巻第12号子ども欄巻頭の物語を分析するために、まず各話のあらすじを以下に示しておく。

1) 第5号掲載「鬼中佐」⁵⁾

鬼中佐といわれた広瀬中佐の武勇を、一家の父親が夕飯後のお話として二人の子どもと妻に話して聞かせる。その内容は、広瀬中佐の生い立ち、成績優秀かつ運動熱心で優しい人柄、海軍大尉となり日清戦争で活躍したこと、ロシア留学時代の逸話、日露戦争「旅順口閉塞作戦」二月二十四日の武者振り、その功による中佐昇進と金鷄勲章四級を賜ったこと、三月二十七日からの同作戦における広瀬中佐の采配と壮絶極まりない最後の有様、名誉の戦死の意義を語っている。子ども欄巻頭の28頁分を充てて、広瀬中佐の人柄や戦争時の勇士を、日露戦争の戦況と戦略と重ねながら表し

ている。

2) 第6号掲載「金州丸」⁶⁾

小石川の金華高等小学校校長による講堂修身の話。五月はじめの金曜日の午後、生徒たちが整列して並ぶ講堂正面には、「名誉の戦死に其名を轟かせた広瀬鬼中佐の肖像と、其横測には日本朝鮮、満州地方の地図が掛かって」いる。

校長は「皆さん、今度の日露戦争は、世界歴史中の最大事件でござりますが、夫のみならず、皆さんを教育する上から、否な吾々日本国民全体の道徳教育の上から、実に古今に比類のない実例を、澤山に吾々の眼前に供せられました。」と言い、元山津沖で不幸の最後を遂げた金州丸の話を始め。日本郵船会社所有の金州丸は速力が速かったため海軍御用船の任務に当たっていたこと。その金州丸が敵艦隊と相対した経緯、乗船していた軍人たちの勇敢な行動、どのような最後を迎えたかを詳細に語り、勇士たちの忠勇を称える。

3) 第7号掲載「新鬼が島征伐」⁷⁾

これは、日本の昔話「桃太郎」の登場人物とプロットを使って仕立て直した物語である。葦原村に子どものいない老夫婦が住んでいる。ある日、お婆さんが川で洗濯をしていると大きな桃が流れてくる。家でおじいさんと桃を切り割ってみると「大日本帝國萬歳」と叫びながら桃太郎が誕生する。赤ん坊は、先祖の桃太郎が征伐した鬼たちの子孫が新鬼が島にいて、「悪戯を始めて、人民を困らせたり、他人の國を略取って占領しようとして」いるので、実は自分も先祖の桃太郎同様鬼退治をするために出てきたこと、文明が進んで鬼たちの使う武器も発達したが、きっと降参させると話す。桃から生まれてすぐに話し始めた桃太郎のことを、老夫婦は「神様が人間の形になって降来してきたのだ」と思い大事に育てる。

月日がたち立派に成長した桃太郎は、犬を連れて山に行き、猿や雉と「四人一所になって遊んだり、戦争の稽古などをして暮らしている。鬼たちが葦原村も略取しようとして企んでいることを知った桃太郎は、犬猿雉とその眷属を率いて出兵する。激しい攻防の末、適格な戦況判断をして攻撃の期を逃さない桃太郎の戦術に敵が降参する。敵の大將はこれまでの罪を謝罪して、占領地の返還と武器・軍艦の献上、百億円の賞金を納める条約を桃太郎と結ぶ。明治桃太郎が葦原村に凱旋すると、祝勝大歓迎会が開かれ天子様から金鵄勲章一級を賜る。また、隣国も残虐な鬼から略奪を免れて平和になったので桃太郎の恩義に感謝した。

4) 第8号掲載「鉄橋破壊」⁸⁾

旅順陥落、大石橋での黒鳩公（クロバトキン）の大敗を知ったロシアが、連敗を盛り返そうと奉天付近で一大激戦を企てている。某日、ロシア本国から二十万人の援軍がハルピンに到着することが分り、日本側はその援軍が奉天に着かないうちに敵を皆殺しにする目的で総攻撃を開始し、未曾有の大激戦が始まった。

その数週間前に、ハルピンに向かって鉄道に沿って道を急ぐ二人の支那僧があった。途中ロシアの哨兵に咎められながらも、布教の為に満州を旅行する僧だと言い逃れながら、二人は遂に松花工の鉄橋に到着する。

ロシアの援兵を乗せハルピンを出発した汽車が松花江の鉄橋をわたっているまさにその時、大爆音が響き鉄橋が真二つに割れ、客車は兵を乗せたまま川に落ちていった。このためロシアの援軍は到着せず、日本軍の大勝利となった。

この激戦の1ヵ月後、綿火薬を設置して鉄橋を破壊した嫌疑で、二人の支那僧がロシア憲兵に捕らえられ、軍法会議にかけられた。取り調べているうちに、二人は日本人に違いないと断定されたが、しらを切りとおし、死罪判決となり銃殺刑に処された。

5) 第9号掲載「真乃勇者」⁹⁾

日露開戦前、アメリカを出て日本に向かう汽船「グレイト・バード」にはアメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・オーストリアなどの欧米人、アジア人ではトルコ・「支那」・日本人が乗り合わせている。ロシア人は一人もいない。

日露戦争が始まったある日、甲板上のドイツ陸軍士官ケルレルとイギリス新聞記者ブラオンの間で日露戦争談が始まる。たくさんの方がふたりを取り囲む中、具体的数字を挙げながら日露の軍勢力を細かく比較し、国民性を含め勝利予想を論じ合っている。日本が勝つと言い切るブラオンの言葉に、周りから拍手喝采がおきると、納得できないケルレル大尉は怒り出し、ブラオンに決闘を迫る。だが、彼が決闘の申し込みをかわして姿を消すと、甲板上の人たちは卑怯なイギリス人だと嘲笑する。

ところが、船から子どもが海に落ちたとき皆が騒いでいる中、すぐに海に飛び込んで子どもを助けたのは他でもないブラオンであった。決闘から逃げたことで卑怯者といわれたブラオンこそ、真の勇者だと皆が感心した。

6) 第10号掲載「お隆さんの手柄」¹⁰⁾

陸軍大尉國野為也（くにのためなり）の長女お隆は、生まれつき利口で活発な美しい10歳の少女である。いじめっ子を投げ飛ばすほど力があり活発だが、品がよく乱暴なことはしない。戦争について、女の子にしては珍しいほどよく知っているお隆は毎日戦さ遊びをしているのだが、女は大きくなっても戦争に行けないことを嘆いている。

7歳の弟とその友達たちと陸軍・海軍・看護婦になって軍歌を歌いながら遊んでいると、弟が低い木の枝にとまっている一羽の鳩を見つける。弟とお隆のどちらが鳩を撃つか、互いに空気銃を取り合った末、お隆が鉄砲を奪いとり豆の弾で狙い定めて撃つと、うまく命中し鳩を捕まえることができた。

気絶した鳩を持ち帰り、姉弟で鳩の面倒をよく見たので、鳩はよく慣れて、毎日かわいい声で「デデッポッポー、ニホンカーツ、ニホンカーツ」と歌っている。この話は、お隆を普段妹のようにかわいがっている男性の談話として語られているので、読者が実在の少女の話と捉えやすい効果をあげている。

7) 第11・12号掲載「兵卒フリッツ」¹¹⁾

40年前にドイツとフランスが戦争をしたときに起こった面白い話、という前置きから始まる。

ドイツのブランデンブルヒに、いつも兵卒遊びばかりしているので「兵卒フリッツ」と呼ばれる

男の子がいた。父親が戦地から送ってきた手紙の端に、「(別に欲しいものはないが野菜がなくて困る) 家に在るいゝ馬鈴薯の一袋もあったもんなら、皆が、どんなに喜で食べるかも知れないよ。」と書かれていた。これを聞いたフリッツが、家の納屋から上等のジャガイモを袋いっぱい詰めて、父親に届けるため旅に出る。途中の宿屋で、老兵から旅の理由を聞かれたフリッツが話して聞かせると、老兵は感涙する。宿のお客が次々とフリッツの話聞き、その話に感心した大人たちはこんなに偉い子どもを一文無しで旅させるわけには行かないと、お金を出し合いフリッツに持たせる。

幾日も旅を続けたある日、ドイツ軍司令官に目通りできたフリッツがここまで来たわけを伝える。疲れたフリッツが眠ってしまうと、司令官は部下に、父親(軍曹)を探し大将の陣で催す夕飯に出るように伝えること、そこに将校を残らず招くことを命令する。

大勢の将校たちは、夕食の席に軍曹がひとりだけ同席していることと、白い布をかぶせたテーブル中央の大皿を不思議に思っている。布を取って現れたのがジャガイモで、それを食べるには格下の軍曹の許しが必要だと聞いた将校たちは不愉快な面持ちになった。そこでジャガイモが食卓にあるわけを皆に聞かせるために、司令官がフリッツを呼ぶ。再会した親子は抱き合い大声で泣く。その様子に皆が心打たれ、フリッツが旅に出た理由とその一部始終を話し始めると、父を慕って何百里の道をやってきた子どもの心と行動が感動をよぶ。このことで司令官はフリッツの父親に免役状と一生の恩給を保障し、また、将校たちがフリッツのために出したお金を贈物として渡す。こうしてフリッツと共に父親は無事に家に帰ることができた。

以上7話のうち、「兵卒フリッツ」を除く6話が日露戦争関連の話であり、日露戦争の英雄談、昔話の主人公を英雄に見立て再話した話、戦争下の子どもを描いた話となっている。主人公に注目すると、「お隆さんの手柄」以外の6話はすべて男性(男児)が中心人物である。

4. 戦争をいかに描いたか

(1) 戦局や軍事力の具体的説明

大人が主人公の「鬼中佐」「金州丸」「鉄橋破壊」「真乃勇者」には、表2に示したような人名・戦艦名が示されている。また、露西亞、遼東半島、満州、仁川、旅順口など戦闘地名も具体的に書かれ、実際に起きた戦況を講談のような語り口で書いていく。また、昔話を基にした「新鬼が島征伐」でも、戦闘艦、巡洋艦、駆逐艦、水雷艇、潜航水雷艇、陸軍運送船、地雷火、大砲、機械水雷、魚形水雷などが次々と紹介される。

事実を取り上げた「鬼中佐」「金州丸」は、まるで戦況を見てきたように状況を描写する。一例として「鬼中佐」から、仁川の勝利の後、旅順口の水雷襲撃計画を遂行する一場面を紹介する。

かくて、二月二十四日の午前二時といふに、船列整々として旅順に近づけば天寒うして浪荒く、夜は暗うして咫尺も分らず、敵の艦隊は、此前二度の我が襲撃に恐れ怖れて、探海燈も點

けぬと見えたり。

そこで閉塞本隊は、浪を蹴破り、全速力を以て、港口まで突き進んだ所が、此時敵艦は始めて我が襲撃を覚ったと見えて、俄かに探海を以て四方を照らし、本隊目がけて雨霰と大砲をうち出した。其音のすさまじい事と云ったら、千百の雷が一時に落ちる様で、今迄の静かさとは打って変わった光景だ。まかり間違ふといふと、五艘の閉塞船は、目的の所まで行かない中に、打ち沈められなければならぬ所だが、そこは日本の海軍仕官丈に、甘く潜り抜け抜けては乗り切って、港の出口に近づき、めいめい此処ぞと思う場所に行って碇を下して自分で火薬に火をつけて爆発沈没した。¹²⁾

具体的日時、天候、静けさと爆音、暗闇と閃光、火薬のにおいまで感じるような語りの文体である。このような具体的描写の方法は、大国ロシアと日本を比較する場面でも使われている。その記述例として、「真乃勇者」の激論場面の一部を抜粋して紹介する。ドイツ士官ケルレルがイギリスの新聞記者ブラオンに、日本がロシアに勝てない理由を軍備や国土の広さ、士官の人数などを挙げてとうとうと説明する。

日本と露国は国に大小の違いがある通り、夫れ丈け、軍備に非常な相違がある。(中略) 先ず、露国の陸軍を見給へ、すは戦争といふ日には、士官から下士卒合はせて百三十四萬人、其外に予備士官いかが八十五萬人(中略) 極東派遣軍が二十萬人、そこで、之に対する日本の陸軍はどうだ、平時は僅か十六萬、戦争の時と言っても、漸、六十萬しか備えられんじやないか、之で以て陸軍の方の勝敗は言はずとも知れやう¹³⁾

このような調子でドイツ士官は、コサック兵と日本の騎兵比較、太平洋艦隊やバルチック艦隊と日本艦隊の比較などを次々と示し、戦争すればロシアが必ず勝つと断言する。これは4頁(33行)を占める分量がある。それ対して新聞記者ブラオンは、兵士の数、戦艦の数でロシアがいかに日本を上回っている、数が多いから勝てるわけではないと反論を開始する。およそ6頁(50行)にわたる反論の一部を以下に示す。

…日本はつい先頃まで、日清戦争だの、北清事件だの、たびたび実戦をやったから、陸軍でも、海軍でも、すっかり、戦争の稽古が積んで居るといふものだ、露西亜はどうだ、なる程、馬賊だの、一揆などとは喧嘩したが、有力な軍隊と戦争したのは、クリミヤ戦争このかたないじやないか、従って又、日本の陸海軍は、一切最新式の戦術を応用して居る。この点に於て、露西亜の方は百歩も千歩も譲らんければならぬと思うね。夫から、念のため、も一つ論じたい。近世の兵術家のいふ様に戦争の勝敗は、主に軍隊の精神に係る。まあ、日本人の愛国心の盛なのを見給え、とても露西亜人なぞが、誰のために戦争するのだかさへ知らないのとは、丸で雲泥の違ぢや。上将校は勿論、下兵卒に至るまで、すっかり、天皇陛下の為にする

戦時下の幼児向け童話

表2 戦争関連の話に登場する軍人・軍艦名

| 『婦人と子ども』第4巻 | | | | | | | |
|-------------------------|--|--|--|---|--|-----------------------|---|
| 掲載号数 題目 | 第5号 「鬼中佐」 | 第6号 「金州丸」 | 第7号 「新鬼が島 征伐」 | 第8号 「鉄橋破壊」 | 第9号 「真乃勇者」 | 第10号 「お隆さんの 手柄」 | 第11・12号 「兵卒フリッ ヅ」 |
| 主人公 | 広瀬中佐 | 金州丸の 兵士 | 明治桃太郎 | 2人の日本人 | イギリス人の 新聞記者ブラ オン | 10歳の少女 お隆さん | ドイツ軍隊軍 曹の子 フリッツ |
| 内 容 | 広瀬中佐の生 い立ちから旅 順港閉塞まで の武勇伝 | 金州丸が元山 津沖で不幸の 最後を遂げた 顛末 | 無謀なことを 起こす新鬼が 島の鬼を勇敢 な明治桃太郎 が征伐する | 「支那僧」に変 装した日本人 の活躍 | 日本軍の勝利 を主張してい るブラオン は、海に落ち た子どもを救 助した真の勇 者である | 眉目秀麗な少 女の勇ましさ | 戦地の父親に ジャガイモを 届ける男児の 親をおもう心 と行動のすば らしさ |
| 敵 国 | ロシア | ロシア | 新鬼が島 | ロシア | (記載なし) | ロシア | (記載なし) |
| 軍人名 軍 隊 など | 連合艦隊司令 長官東郷中将、 有馬中佐、広瀬 少尉(中佐)、齊 藤大尉、正木大 尉、島崎中尉、 森中尉、海軍、 勇士七十七人、 十六勇士、杉野 兵曹長、小池機 関兵、菅沼兵 曹、海軍 | 広瀬中佐、陸 軍、八木船長、 溝口海軍少佐、 飯田大主計、椎 名中隊長、桜井 大尉、寺田中 尉、横田中尉、 桧垣少尉、鷺曹 長、岡野茂逸曹 長 | 明治桃太郎(陸 軍大将)、犬と 雉(陸軍将校)、 猿(海軍将校)、 陸軍、海軍 | 大将黒鳩公(ク ロバトキン)、 スタケルブル グ中将、奥将 軍、陸海軍 | 上村艦隊、陸 軍、 海軍、太平洋艦 隊 | (記載なし) | (記載なし) |
| 船 名 軍艦名 武 器 など | 天津丸、報国 丸、仁川丸、武 揚丸、武州丸、 千代丸、福井 丸、米山丸、弥 彦丸、駆逐艦 隊、軍艦、水雷 駆逐艦隊、水雷 艇隊、駆逐艦霞 | 金州丸、水雷艇 隊、浦塩艦隊、 ロシア、グロン ボーイ、リユー リック、水雷 艇、五洋丸 | 戦闘艦、巡洋 艦、駆逐艦、水 雷艇、潜航水雷 艇、陸軍運送 船、地雷火、大 砲、機械水雷、 魚形水雷、銃 剣、 | 綿火薬、地雷 | グレートバー ド、リユーリッ ク、戦闘艦、巡 洋艦、水雷母 艦、駆逐艦、水 雷艇、海防艦、 報知艦、バル チック艦隊、日 本艦隊、黒海艦 隊、裏海艦隊、 朝日、三笠、初 瀬、敷島 | (記載なし) | (記載なし) |

命だといって居る。夫に彼の君の国なぞも関係があるが、十年前のそら三国干渉だ、日本ではひどくあれを遺恨に思って、いつか、敵を取らんければといふので、十年の間、一生懸命に、夫ばかり目的にして、軍隊を練って来たのだもの、今に露兵に向ふ時は、丸で一騎當千の兵となるに違ない。

君は、ただ数や大きさの上から議論して、露西亜が勝つに決ってる様にいふが、我輩は以上の議論によって、きっと日本が勝つといふのだ。どうだ、ケルレル大尉、我輩の議論の方が十分根拠があるだろうじゃないか。¹⁴⁾ (下線は引用者による。以下同様。)

ドイツ士官とイギリス人記者が対立して討論する様は、当時の国家関係を象徴しているのだろう。大国ロシアと比べると日本は量的には劣るが、日本の戦争経験と日本人の志の高さによって結果的には日本が勝利するという確信をイギリス人が船上で論証するのだが、外国人の会話を通して読者をも説得するような材料を並べ立てている。

(2) 戦死と報国

戦死の場面についても、臨場感たっぷりに書き上げている。例えば、広瀬中佐の最後は次のように語られる。

小池機関兵は飛び来た十二听砲の為に打ち貫かれて其場に即死した。此時（広瀬）中佐は地図を手に持ち、栗田大機関士と相並んで艇尾に居った筈なのに、暫くして一人の水兵が頭から顔にかけて、一面にサッと潮をあびせかけられたと思って其の拍子にふり向ひてみると、こは如何に中佐は両手を垂れて俯くよと見る間もなく忽ち激浪の中に墜落して仕舞った。後には、二銭銅貨程の肉の塊と、血だらけの地図とが残って居る許り、前の水兵が潮水を浴びたと思つたのは全く忠勇武烈の中佐が血潮であったのだ。続いて、栗田大機関士、菅沼兵曹も傷ついたが、兵曹はやがて駆逐艦霞に救ひ上げられる時、一声高く『帝國万歳』と叫んで息絶えた。¹⁵⁾

小池機関兵は打ち抜かれて即死、広瀬中佐の体が二銭銅貨程の肉の塊ほどしか残っていないこと、傷ついた菅沼兵曹の最期などをまるで見てきたかのように綴る。

金州丸が沈む場面も、講談調で具体的に語られる。敵艦の発射した魚形水雷が金州丸に命中し、戦隊がまっふたつになる。船が徐々に沈み始める中、兵士たちはロシア号に射撃を行う。敵艦からは絶えず砲撃を受け、水は兵士たちの膝まで達した。

そこで気早の曹長岡野茂逸は、軍刀引き抜き、我が腹につき立て、物の見事に切腹した。かくと見た仕官兵卒の誰れ彼れ、同じく銃口を我が胸に宛てがひながら一、二、三の、掛け声で、ズドンと一発、潮風に高く響かせると同時に、枕を並べて打ち斃れた。残る面々は『なあに、生命の限り、根限り、一発でも敵にくれてやらんければ』といふので、潮水の肩を浸すまで、両手を高く上げては打って居ましたが、間もなく敵から発した水雷一発、ズドンと響くや、船も人も大空遙に吹き上げられたが、『日本帝國万歳』の声は空中遙かに響き渡った。夫と同時に、我が金州丸は、全く姿を海中に没し去りました。此時は、丁度二十六日の午前二時近く



図2 金州丸撃沈の場面
(風俗画報増刊第5号「征露図会」第五編1904年)

でありました。¹⁶⁾

まさにその場面が、風俗画報臨時増刊『征露図会』第5編（1904年5月10日発行）に描かれている（図2）。図の右側が「金州丸遭難陸兵最期に臨み一斉射撃の図」、左側が「将士屠腹の図」である。いよいよ最後という時の姿であろう。地図を引き裂く軍人、後ろの一人は首に刀を突き立て、中央には切腹した軍人と今まさに軍刀をぬこうとする軍人。一番手前には既に事切れている軍人の姿がある。

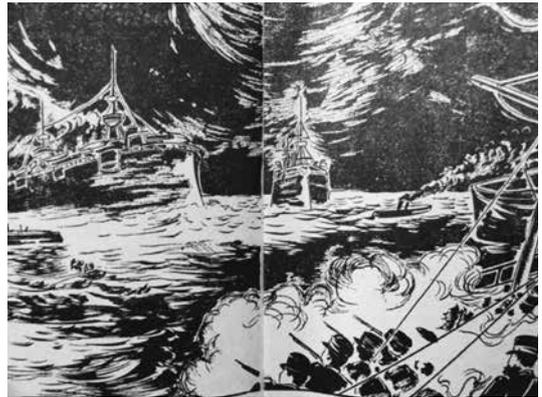


図3 ロシア号に向け一斉射撃をする兵士たち
（『婦人と子ども』第4巻第6号 1904年）

『婦人と子ども』誌の「金州丸」の挿絵は、死にゆく兵士たちの行動を『征露図会』ほど直接的に描写しない。沈みゆく船上で最期を覚悟した中隊長の命令のもと、ロシア号に向けて一斉射撃を行う兵士たちの姿を描いている（図3）。

最期の時、兵士たちは皆一様に「日本帝國萬歳」の言葉を叫んで死んでいく。「鉄橋破壊」でも、銃殺の刑に処されるふたり（支那僧に変装した日本人）が「奉天の大勝利を祝し、大日本帝國萬歳を唱えながら死に就いた」¹⁷⁾と語られる。

以上のように日露戦争を題材にした話では、戦闘描写と兵士の最後を克明に描く。さらに、なぜ命を投げ出すかを、繰り返し明示している。例えば「広瀬中佐」では、語り手である父親が、日清戦争時に軍艦扶桑に乗り込んでいた広瀬中佐の詩を話に盛り込む。

生于扶桑、死于扶桑、一死報國、七生護皇、

どうだ、太郎さん、此詩の意味が分るかな、扶桑といふ日本に生まれて来て、扶桑と名のつく軍艦で死ぬのは、面白い、國の恩に報ゆる為に一度は死ぬるが、七度も生まれて来て、天皇陛下に忠義を尽さうといふのだ、どうだ、豪い者だらう。¹⁸⁾

（広瀬中佐の遺骸は）東京に捧送され、四月十三日、水交社で盛なる葬儀を営まれたが、畏くも陛下よりは勅使を御差し遣はし下すったといふのは、中佐死後の名誉此上はあるまい。

中佐は、かくて、名誉の戦死を遂げられたが、併し中佐の戦死は、内に在って我國民の元気を鼓舞することはどの位だか知れないと同時に、他に向っては、所謂、日本軍人の大和魂を明に世界萬國に示したといつてよい。これでこそ、一死報國、七生護皇といふ中佐の志を達したといふべきだ。¹⁹⁾

父親は、広瀬中佐の死にざまを「名誉の戦死」と称える。天皇陛下に忠義を尽くし、国から受けた恩に報いようと覚悟を決めた広瀬の戦死を、肯定的に子どもに伝えている。これは生徒たちが小学校校長の講和を聞く設定で書かれている「金州丸」でも同様である。

敵艦に囲まれた金州丸と運命を共にすることを決意した陸軍将士は少しも騒がず、「吾々は、此船と運命を共にするのだ」と決意し、椎名中隊長が「…洋中の藻屑となり果つるは、聊か残念であるとは申せ、君国の為敵前に死するは一つなり。忠勇なる諸君、願わくは潔く覚悟を決せられよ、覚悟を決して、陛下の萬歳を祝し奉りて此船と共に沈まん」²⁰⁾

之等の陸兵の健気なる行為は、実に日本武士の精華とも申すべきでありまして、大なる感化を国民に与えました。されば鴨緑江畔に居られた我が陸軍の士気は此変災を聞きまして非常に奮激したと申す事であります。……彼の勇士たちの忠魂義膽は船と共に朽ち果てないで、いついつまでも、我国の護りとなるであります。 ²¹⁾

講和者の校長は、最後まで戦って海に沈んだ陸軍兵士の姿を、「日本武士の精華」「忠魂義膽」と表現する。持てる力を最後まで振り絞って戦場で命を散らす兵士こそ日本武士の真髓であり、忠節を守り正義を貫く決意が日本の護りとなると称揚する。この発言もまた、戦争肯定、戦争美談の語りである。

5. 子どもの姿

(1) 優しさと正義感

「鬼中佐」「金州丸」「鉄橋破壊」には、中国大陸や洋上の激戦地でロシア軍を相手に戦う兵士、すなわち成人男子の勇ましい姿が強調されていた。では、子どもはどのような存在として書かれているだろうか。

「新鬼が島征伐」は昔話「桃太郎」の骨格に、この時代の肉づけをした物語である。滑川道夫(1981)や鳥越信(2004)の著書に詳しく報告されているように、主人公の桃太郎像は時代をうつしこみ変容する。ここでの桃太郎は、両手に国旗と軍艦旗を持ち「大日本帝国萬歳」と叫びながら桃から誕生する。大人は死を前に「大日本帝国萬歳」の言葉を口にするのに対して、子どもである

桃太郎には誕生時にこの言葉を言わせている。

犬猿雉と遊びながら戦争の稽古をして毎日を暮らす桃太郎は、芦原村に危機が迫ったある日、新鬼が島征伐に出かける決意を老夫婦に伝える。出発の日、明治桃太郎は將軍として三匹の将校(犬猿雉)とその眷属を引き連れて村の港から軍艦・大運送船に乗り込んで出港する。その折、海軍楽隊演奏にのせて陸兵たちが歌う歌詞に桃太郎の性格が謳われている²²⁾。



図4 陸軍大将の軍服を身にまとった桃太郎
(『婦人と子ども』第4巻第7号1904年)

桃から生まれた桃太郎 気はやさしくて力持

鬼が島をば伐たんとして 勇んで家を出かけたり

意気込んで征伐に向かう桃太郎が、優しい人物であることが謳われる。優しいからこそ、乱暴や略奪を許さない。日々鍛錬して対戦に備え、その日が来たら人々のために自分が先頭に立って戦い平和な世に導く。このような優れた人物は、結果として自国のみならず隣国からも感謝され、金鵄勲章功一級をいただく栄誉に預かることができることを、この物語は語っている。

戦地の父親にジャガイモを届ける少年の話「兵卒フリッツ」でも、子どもの優しい心が大人の心を変えていく様子を描いている。父親を思うフリッツの言動は、宿屋の客、司令官、将校たちの胸を打ち、フリッツ一家にとって幸せな結末が用意される。

このように、男児を主人公にした話は、優しさと勇気、弛まぬ努力、正義感による行動が、自分を含めた人々の幸せにつながることを伝えている。

(2) 女兒の心に宿る勇ましさ

女兒が主人公の話は「お隆さんの手柄」（第4巻第10号）だけであるが、この10歳の少女は綺麗な容姿に勇ましい心を宿している。お隆は、出征する父親に次のように言う。

お父さん、露西亜は日本の仇敵ですねえ、ほんとうに憎いわ、大きな國をかさにきって、意地のわるいことばかりして。お父さん！シッカリやって下さいな。お父さんのお名前は國野為也といふじゃありませんか、國の為なら、お父さんが戦死なすっても、妾泣きはしないの、ねえお父さん！露西亜の兵隊を逐ひまくって下さいな。²³⁾

父親はこの言葉に大喜びして當所に赴くのである。本稿で取り上げた戦争関連の童話では、日露戦争の開戦理由が明快に表現されていない。上記のお隆が言うように、ロシアが「日本の仇敵」であることを前提に話が進むのである。開戦に至る過程を幼い子どもたちに分るように説明することは、簡単ではなかったのであろう。

お隆はロシアが負けたことを新聞で知り、「も一人くらい斬ったかしらん」と、父親の活躍に思いをはせる。そして、「妾大きくなったら（満州に）行きたいの、けれど妾は女だから……」と、参戦したくても行けないことを悔しがる。敵を倒したい気持ちを強く持っても、女であるが故に兵士として戦場に立てない悔しい思いがこの一文に表現されている。さらに、「（鉄砲の弾を）日本の兵隊さんに上げて、露西亜の兵隊さんを撃たせたいわ」²⁴⁾とまで言うのである。物語後半ではお隆が、弟の盛とその仲間の雷太郎、



図5 空気銃で鳩をねらうお隆
（『婦人と子ども』第4巻第10号1904年）

武、勇次郎、国ちゃんを引き連れて軍歌を歌い兵隊や看護婦になって遊んでいるときに、木にとまった一羽の鳩を盛が見つかる。そこで盛とお隆が空気銃を取り合い、お隆は弟を突きのけて銃を奪い見事に鳩を撃ち落とす。母親に「露西亜の兵、隊生け捕って来たァ」と弟が言うと、お隆も「日本女子豪らいでしょー」と成果を報告する。ここには、鳩を露西亜兵に見立て、それを撃つ日本女子も豪いのだと主張するお隆の姿がある。

お隆は、日ごろから戦局を気にかけ、父親の武勇を願い、戦地に赴けない女である身の悔しさを感じている。そのお隆の想いが、時代色を帯びた遊びの中で勇ましさとってあらわれた。読者に女の子の勇敢な心を意識させ、鼓舞するような物語である。

6. まとめ ー死を恐れない勇士と戦争を恐れない子どもの姿ー

雑誌『婦人と子ども』では、日露戦争開戦後、戦争に関する話題が少しずつ増えていった。雑誌全体をみると、戦地を思う短歌や作文、出征軍人遺族児童の報告などの戦争に関する記事を1905年9月発行の第5巻9号まで載せていた。子ども欄では、1904年5月発行号から12月発行号まで、時局にあわせ戦争を意識した物語が巻頭を飾る。

しかし、日露開戦後の1904年2月8日から1905年9月5日ポーツマス条約締結までの期間、戦争関連の物語を掲載し続けたわけではなかった。まして、まだ日露戦争が終結していない1905年1月発行の第5巻第1号から、巻頭の幼児向け童話が西洋童話に切り替わっている。その意味で、『婦人と子ども』誌は戦争色に染まりきらない面を保持した雑誌であった。

戦時下を通して戦争童話が提供されたわけではないが、戦争を肯定的に描いていたことに違いはない。日露戦争時には武勇談の題材が選ばれ、日露戦争の英雄談、昔話の主人公による征伐話、戦争下の子ども的心情を描いた話が掲載されていた。とりわけ実際の戦況を取り上げた話では、活躍した軍人や近代的装備を駆使した戦艦名などを登場させていた。さらに日本武士的な大和魂を持ち、近代的な兵器や戦術を駆使する軍人たちの最期は臨場感ある語り口で綴られ、忠君報国の精神が称えられていた。

分析対象の童話に登場する子どもの数は少ないが、彼らが戦争を嫌がる姿は全く描写されない。皆一様に敵を倒すことを正義と考え、日本が勝つための努力と協力を惜しまない。このような子どもの心根に在るのは、優しさと勇ましさであることが強調されていた。

実際、明治全期を通じて「戦争ごっこ」は男児の好む遊びであった²⁵⁾。明治31年生まれの奥田勝蔵氏（奈良県生駒郡）は、「日露戦争前後やよってに、戦争ごっこばかりですワ。子どものうたう歌も、その時分は軍歌が多かったですな。…」と、山遊びでの戦争ごっこを回想している²⁶⁾。テレビやラジオがない明治期、情報は新聞や雑誌を読むことができる大人に、まず届けられた。そして大人の口にのぼる話から、子どもたちは情報をつかみとっていた。大人が戦争話を話題にするそばから、子どもたちはそれを自分たちの話題や遊びに取り込んでいったのである。

雑誌『婦人と子ども』の子ども欄に掲載された戦争話は、戦争を物語に変換し、身近な大人の口から幼い子どもに戦争美談を説いて聞かせる話材として存在した。そこで主張された精神は、忠君

愛国を肯定し、自国の勝利のためには死をも恐れない勇ましさを是とする人間像・子ども像であった。

なお、編集責任者であった東基吉が日露戦争下にどのような考えで子ども欄を構成したのか。このことについては稿を改めて論じたい。

注

- 1) 雑誌『婦人と子ども』の掲載童話を分析した研究として、柿岡玲子『明治後期幼稚園保育の展開過程—東基吉の保育論を中心に—』（風間書房、2005年）、北川公美子「明治期の幼児教育における〈お話〉に関する一考察—保育雑誌『婦人と子ども』に掲載された西洋の「談話」—」（東海大学短期大学部紀要、2007年）がある。柿岡は、雑誌における日本風の挿絵と西洋風の挿絵の比率を比較するにあたり、日露戦争に関連した談話が6話掲載されていたことを紹介し、挿絵に社会状況が盛り込まれる意義を述べている。北川の論考は、当時の幼児教育界で推奨された西洋のお話を明らかにすることを主目的としている。そこでは、第3巻第2号から続くインソップ物語が1904年の第4巻第3号に載っていないわけを、戦争の影響と推察し、同巻4号以降から戦争を推奨するような談話が組まれるようになったと報告している。
- 2) 「発刊の辞」『婦人と子ども』第1巻第1号、金昌堂、1901。資料の『婦人と子ども』誌は、幼児の教育復刻刊行会『復刻 幼児の教育』所収（名著刊行会、1979）を使用した。以下の『婦人と子ども』についても、『復刻 幼児の教育』を資料としている。
- 3) 出版当時の経緯については、東基吉「婦人と子ども（幼児の教育の前身）創刊当時のこどもと其頃の幼稚園の状況に就いて」（『幼児の教育』第50巻11号、1951）、津守真「解題」『復刻・幼児の教育 別巻』（名著出版会、1979）を参照されたい。
- 4) 東基吉「婦人と子ども創刊当時のこどもと其頃の幼稚園の状況について」『幼児の教育』第50巻11号、1951、p.25.
- 5) やまとの翁「鬼中佐」『婦人と子ども』第4巻第5号、1904、p.1-28.
- 6) やまとの翁「金州丸」『婦人と子ども』第4巻第6号、1904、p.1-17.
- 7) やまとの翁「新鬼が島征伐」『婦人と子ども』第4巻第7号、1904、p.1-24.
- 8) やまとの翁「鉄橋破壊」『婦人と子ども』第4巻第8号、1904、p.1-14.
- 9) やまとの翁「真乃勇者」『婦人と子ども』第4巻第9号、1904、p.1-21.
- 10) 林天然「お隆さんの手柄」『婦人と子ども』第4巻第10号、1904、p.1-14.
- 11) やまとの翁「兵卒フリッツ」『婦人と子ども』第4巻第11号、1904、p.1-14、第4巻第12号、1904、p.1-11.
- 12) 『婦人と子ども』第4巻第5号、1904、p.18-19.
- 13) 『婦人と子ども』第4巻第9号、1904、p.9.
- 14) 『婦人と子ども』第4巻第9号、1904、p.15-17.
- 15) 『婦人と子ども』第4巻第5号、1904、p.25-26.
- 16) 『婦人と子ども』第4巻第6号、1904、p.13-14.
- 17) 『婦人と子ども』第4巻第8号、1904、p.14.
- 18) 『婦人と子ども』第4巻第5号、1904、p.9.
- 19) 『婦人と子ども』第4巻第5号、1904、p.27.
- 20) 『婦人と子ども』第4巻第6号、1904、p.10.
- 21) 『婦人と子ども』第4巻第6号、1904、p.17.
- 22) 『婦人と子ども』第4巻第7号、1904、p.16.
- 23) 『婦人と子ども』第4巻第10号、1904、p.3.
- 24) 『婦人と子ども』第4巻第10号、1904、p.6-7.
- 25) 半澤敏郎の『童遊文化史』第1巻（東京書籍、1980年）によると、明治全期を通じて「せんそうごっこ

(兵隊ごっこ)」は「独楽遊び」「凧揚げ」「竹馬」「メンコ」とともに、男児の遊び上位5位までに入っている。ちなみに「せんそうごっこ(兵隊ごっこ)」は、男児の遊びの中で、明治前期(明治元年から15年まで)には3位、明治中期(明治16年～30年)5位、明治後期(明治31年～45年)には3位である。

26) 藤本浩之輔『聞き書き明治の子ども 遊びと暮らし』, SBB出版会, 1986年, p.495-496.

参考文献

平出鏗二郎『東京風俗志』下巻. 富山房, 1902, 204p.

風俗画報臨時増刊『征露図会』第5編. 東陽堂, 1904, 44p.

太田才次郎編・瀬田貞二解説『日本児童遊戯集』. 平凡社, 1978, 236p.

滑川道夫『桃太郎像の変容』. 東京書籍, 1981, 622p.

藤本浩之輔『聞き書き明治の子ども 遊びと暮らし』. SBB出版会, 1986, 534p.

鳥越信『桃太郎の運命』. ミネルヴァ書房, 2004, 243p.

柿岡玲子『明治後期幼稚園保育の展開過程—東基吉の保育論を中心に—』. 風間書房, 2005, 255p.

付記

引用文中には、一部現代仮名遣い、常用漢字に改めたところがある。また、読みやすいように適宜、句読点、濁点などをつけている。なお、特にことわりのない限り、引用文中の()内の記述および下線は引用者によるものである。